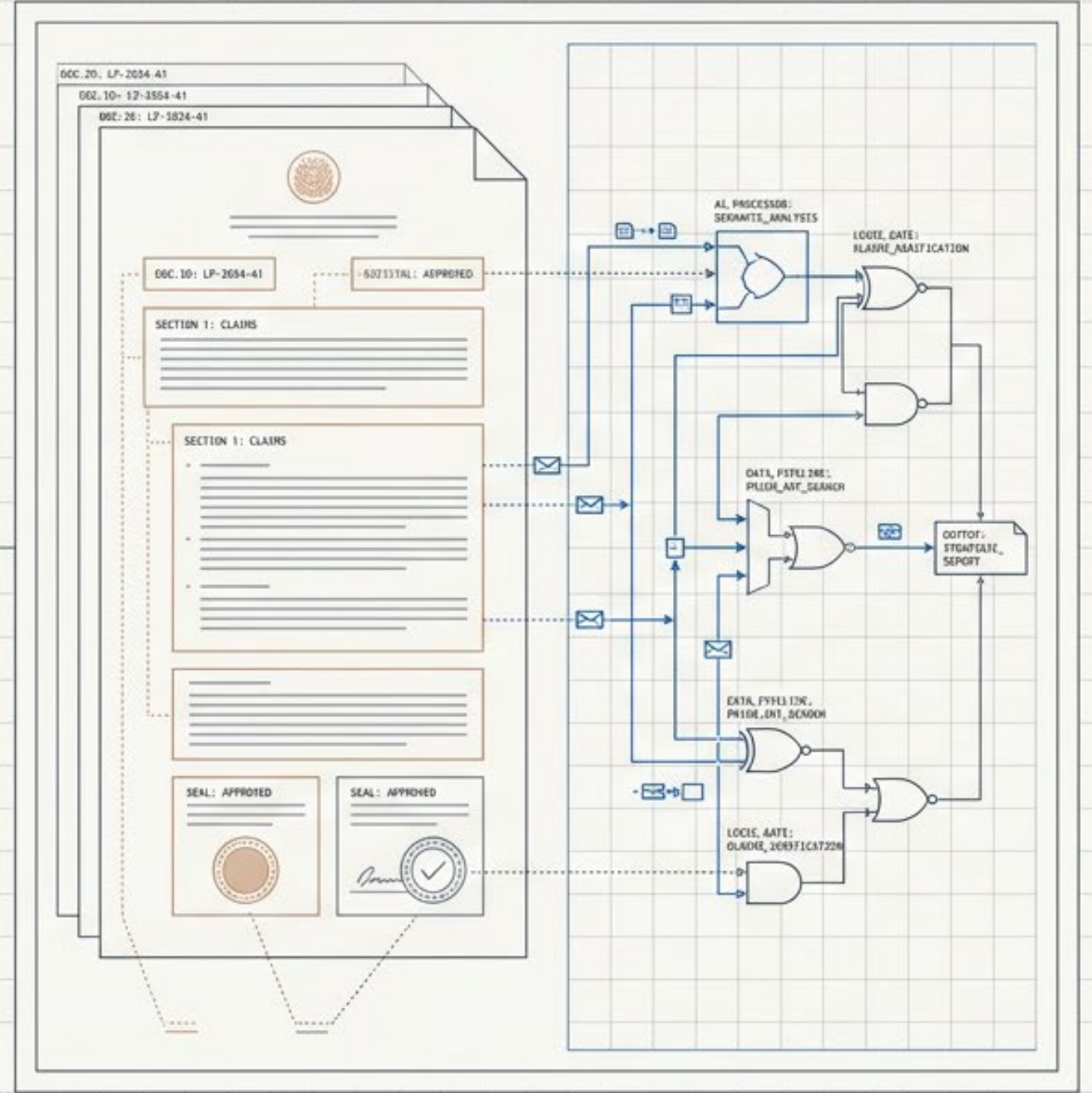


知的財産組織の 抜本的変革

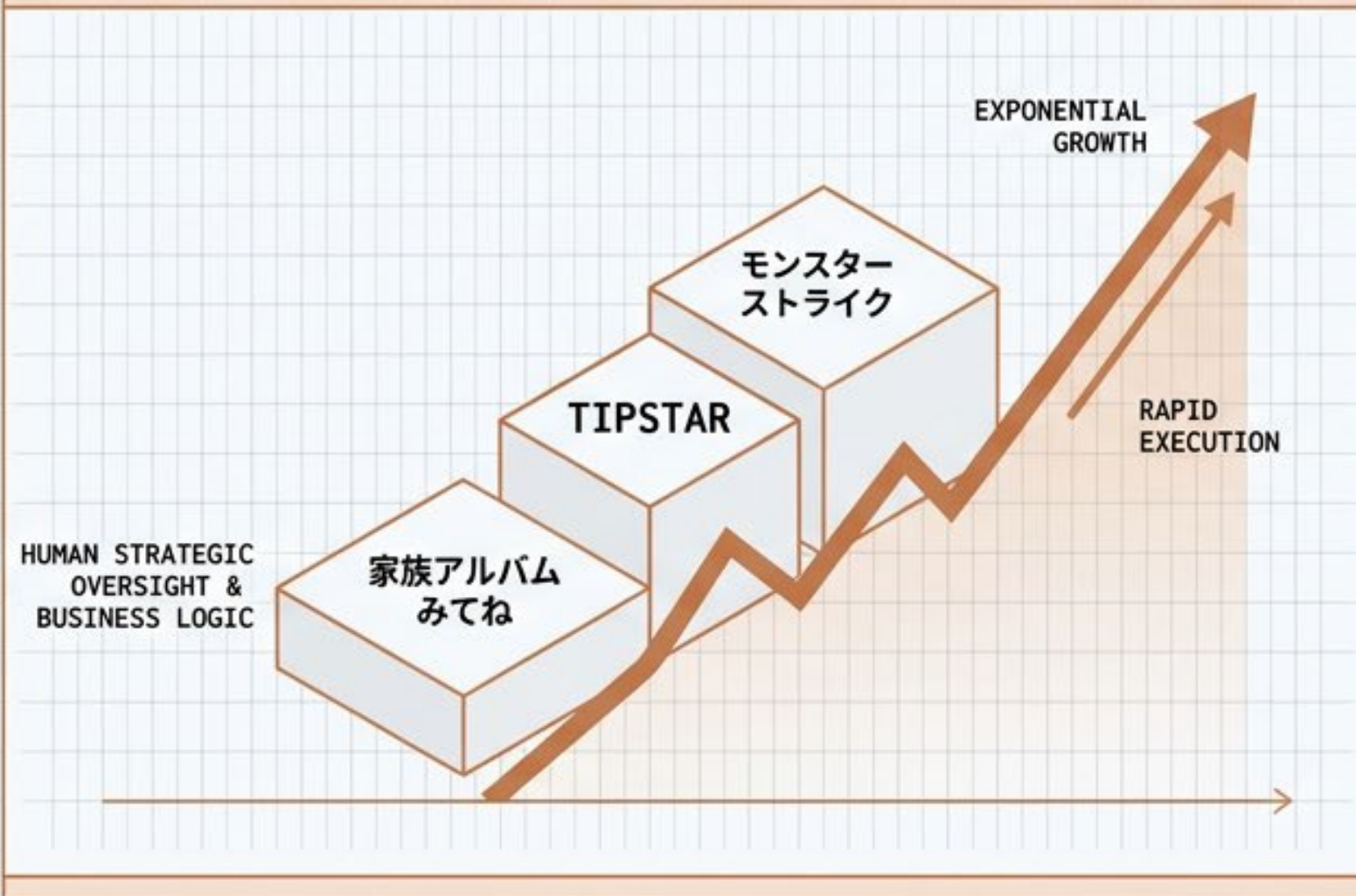
MIXIにおけるAIエージェント活用の 全貌と「仮想的大規模組織」の構築



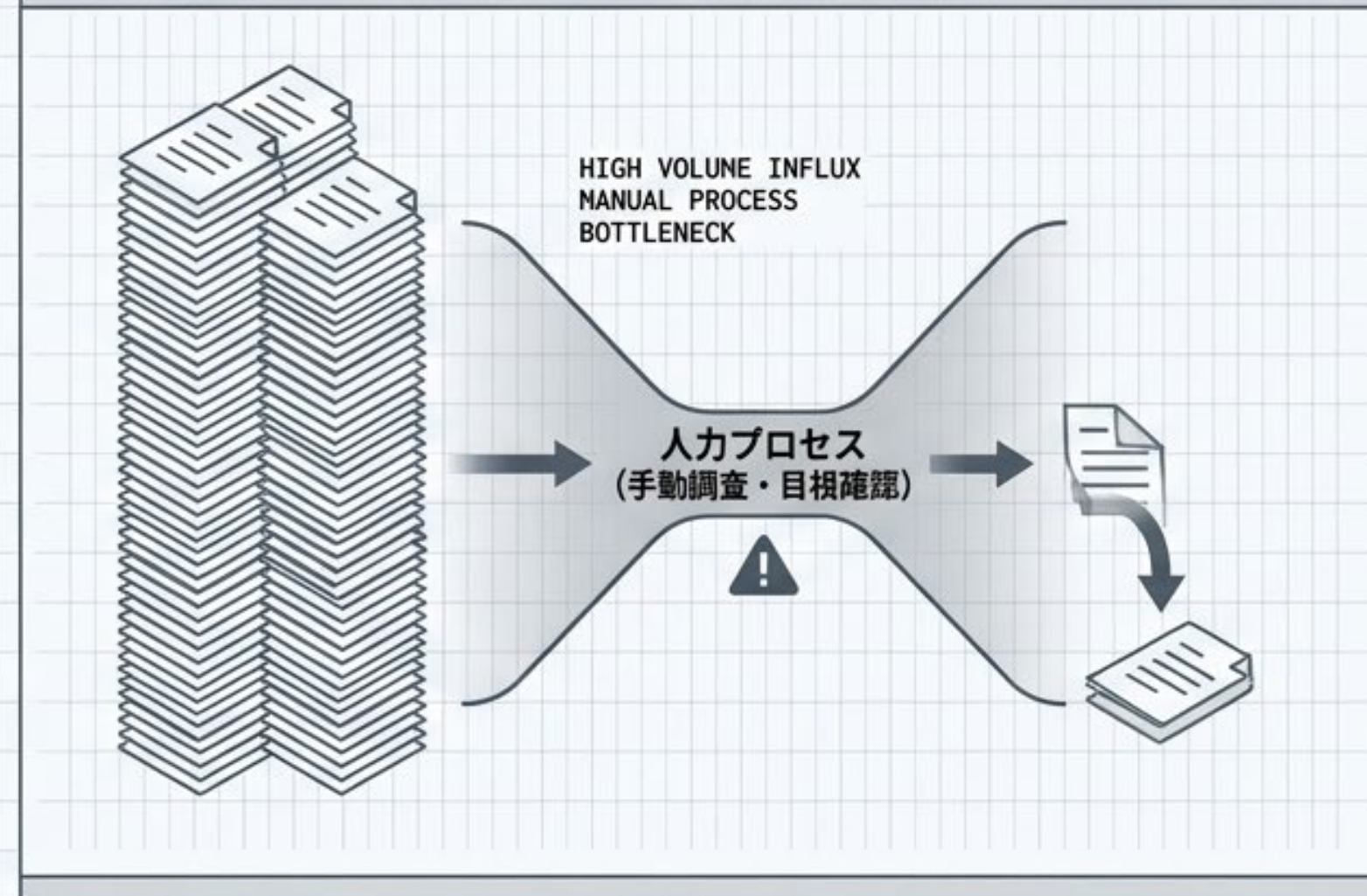
事業の成長スピードと従来型知財業務のジレンマ

多角的なITビジネスの急速な展開に対し、日本の単月特許出願約8万2,000件という高速化する外部環境下では、従来の人力プロセスがスループットのボトルネックとなる。

事業の急成長と法的リスク回避・競争優位性確保の同時達成要求



月間82,000件規模で動く外部環境と人力処理の限界

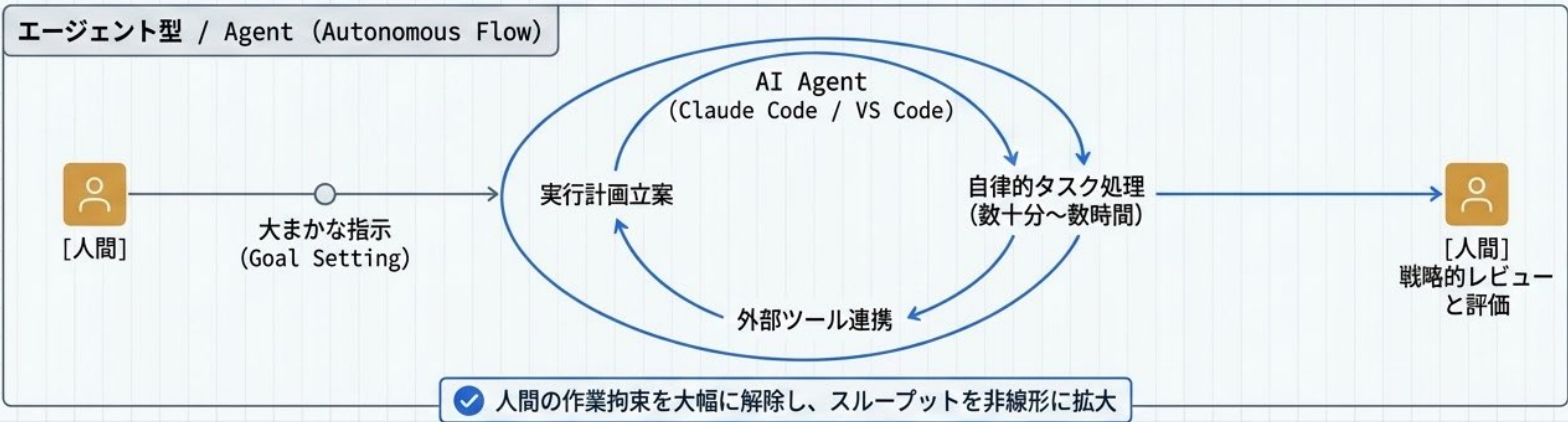


MIXI 全社的AI推進体制 (2025年3月～)

ChatGPT Enterprise導入完了 // 対象約2,000名 // 利用率99% // 月間17,600時間削減 // カスタムGPT1,800個創出

対話型AIから「エージェント型」への進化

人間が指示と確認を繰り返すチャット型は「人間」がボトルネックのまま。エージェント型への移行により、自律的な長時間タスクの完遂が可能に。



AIエージェント導入がもたらす圧倒的な定量的成果

特許出願から商標・リスク確認まで、全域においてリードタイムと稼働量を劇的に削減しつつ、極めて高い精度を維持。

特許出願準備

Before: 外部外注 1~2ヶ月
After: インハウス主導



最大90%削減

インハウス主導で1週間以内に短縮

中間処理 / OA対応



Before: 手動処理 約40日

最大85%時間削減

期間25日へ。特許査定率 97~98% を維持

FTO・先行技術調査



Before:
数百件目視 2~3週間

期間60~70%削減

文脈理解による自動スクリーニング（検索式不要）

商標判定 & 外部掲出物リスク



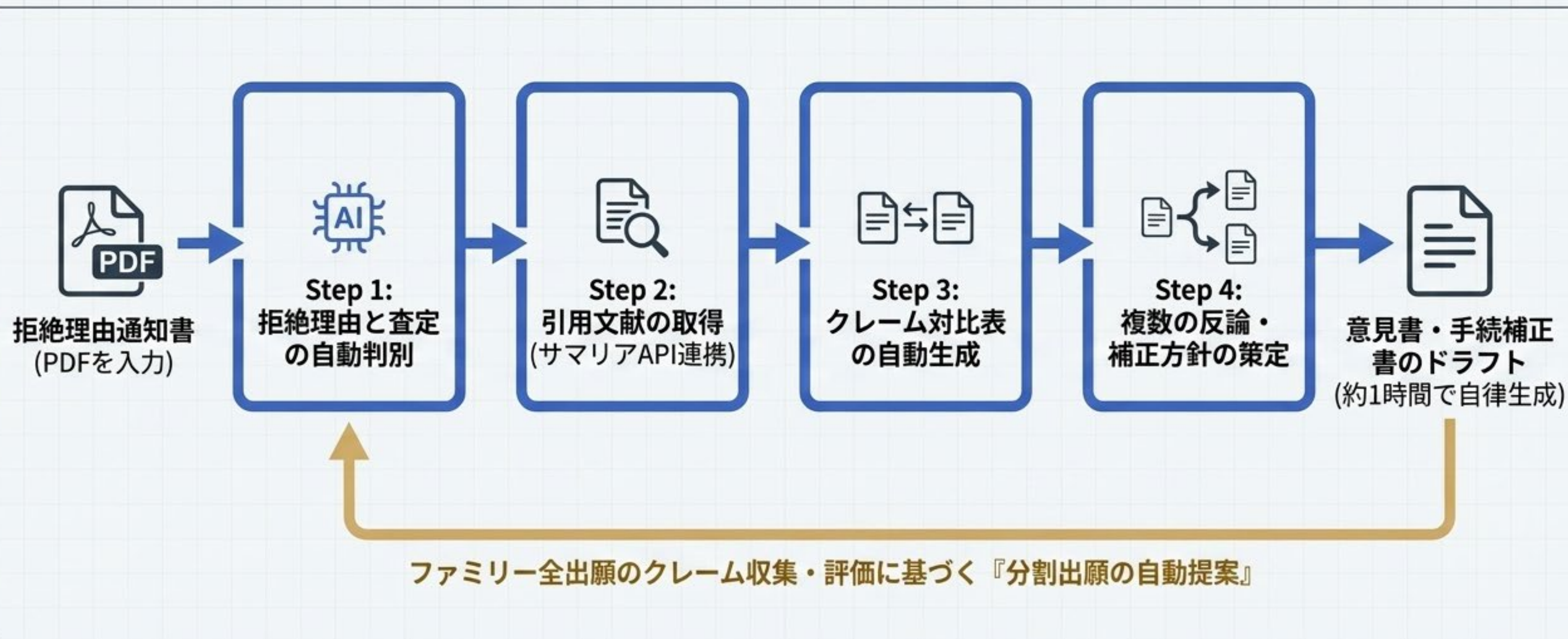
Before:
複数部門のリレー式目視確認

稼働60~80%削減

区分判定30分を1~2分へ短縮。マルチモーダル一括解析

業務深掘り(1)：特許出願・中間処理の自律的パイプライン

発送書類(PDF)の入力のみで、AIが1時間以内に反論から補正書のドラフト作成までを完遂するアーキテクチャ。



業務深掘り(2)：非定型データとマルチモーダル解析

文脈理解による独自分類と、画像・テキストの複合解析により、高度な専門性を要する調査業務を大幅に圧縮。

FTO調査（ガチャ特許の文脈分析）

従来のFI/Fターム分類



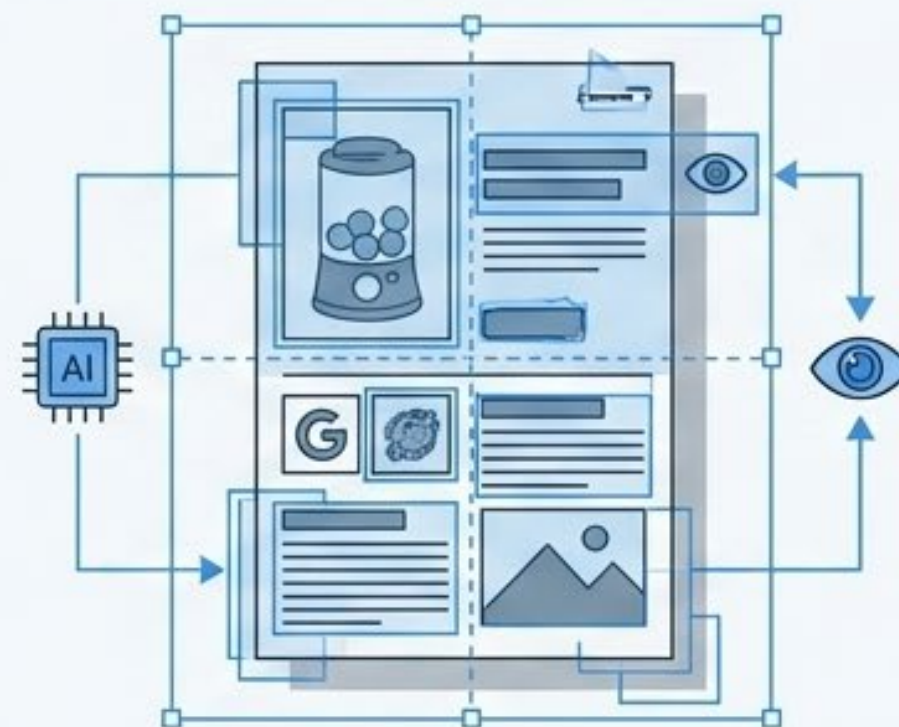
従来のFI/Fターム分類

1,400件のガチャ特許



複雑な検索式から脱却。AIが「抽選ロジック」「排出内容」「確率制御」といった技術観点を文脈から自動抽出し、独自の構造化分類を付与。

外部掲出物・商標リスク一括確認



従来は広報・ブランド・知財の3部門がリレー式で目視確認。マルチモーダルAIが画像と文面を一括で権利侵害解析し、知財部門の稼働を劇的に削減。

エージェント基盤：「つなげる」と「育てる」の二軸エコシステム

単一のツール導入ではなく、AIが自律行動できる「接続先」の整備と、継続的なフィードバックによる「育成」のループ。



Infrastructure as Code [IaC]：暗黙知から形式知への変換

個人の試行錯誤やプロンプト改良をGitHub上でバージョン管理。チーム全体の共通資産（コード）として蓄積し、属人化を排除。

GitHub Repository Asset Distribution (Lines of Code/Prompts)

IPランドスケープ・統括

60,000 lines

(概念分類、事業・市場データ照合)

特許出願・ドラフト

18,000 lines

(発明抽出、クレーム生成、明細書構成)

「誰かが改良すれば、即座に全員の環境が最新化される"組織の脳"」

先行技術・FTO調査

10,000 lines

(スクリーニング、文脈解析)

中間処理 / OA対応

9,000 lines

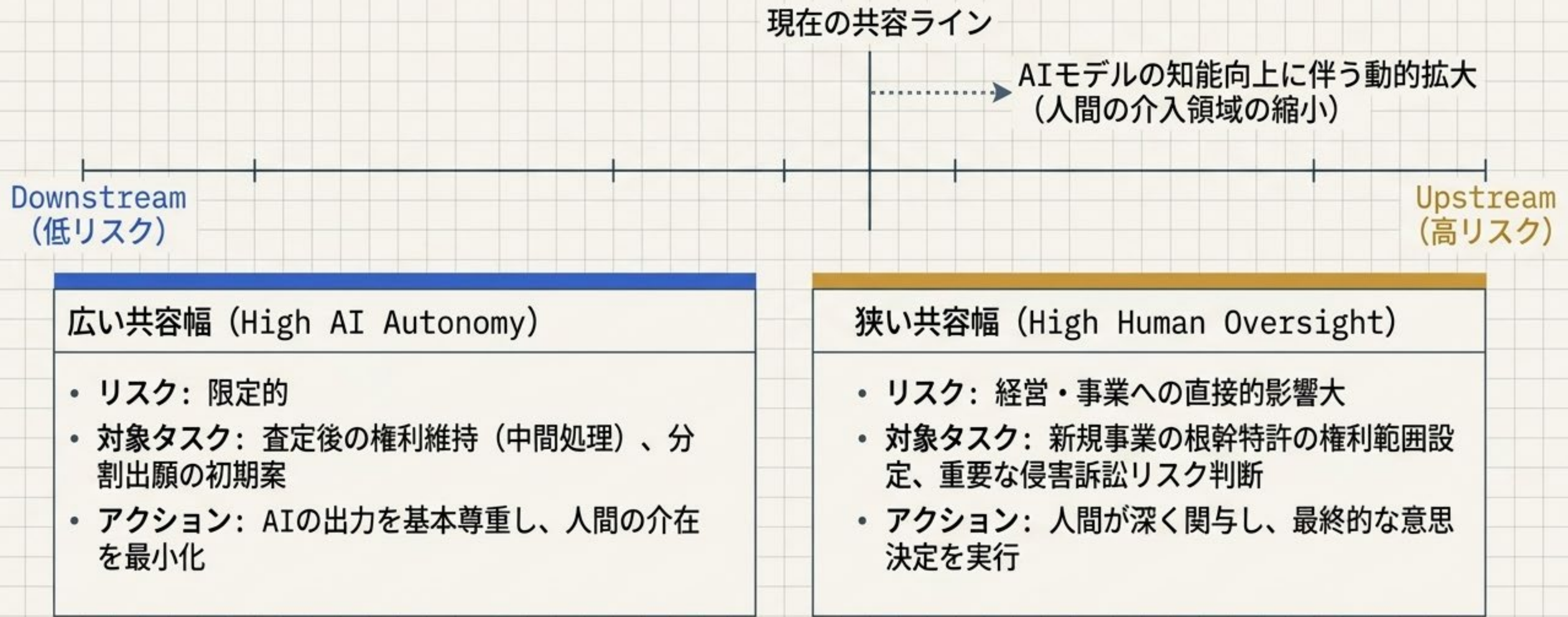
(引例対比、意見書生成)

一般調査・技術分析

4,000 lines

動的リスク管理：AIと人間の「共容ライン（許容ライン）」設計

全件ダブルチェックは効率化の限界を招く。リスクレベルに応じてAIへの依存度と人間の介在レベルを明確に切り分ける。



AI前提時代の知財人材へ：スキルセットの根本的転換

明細書の読解・作成やツール操作の価値は低下。AIを操り、結果を判断し、経営へ結びつける能力が中核となる。

従来のスキル (From)

- 定型的な明細書作成・読解
- 複雑な検索式の構築・手動調査
- 手続業務の確実な遂行能力



これからのコアスキル (To)

1. 要求設計能力

自社のビジネスロジックを言語化し、AIへの確に指示・定義するエンジニアリング力。

2. 評価・判断能力

AIが提示した膨大な分析結果や補正案の妥当性を瞬時に見極める監査力。

3. 事業トランスレーション能力

知財ポートフォリオを単なる権利ではなく、経営価値・事業戦略へ変換して語る力。

企業知財組織の将来像：3つの組織モデル

人間中心のスケールや、チャット併用のハイブリッド型では限界がある。「人少数+AI拡張型」こそが非線形な成長をもたらす。

モデルA: 人間中心型 (Human-Centric)
体制 人員の直接的増加による規模拡大
AI活用 一問一答型チャット等の限定利用
特性 人件費が線形増加、労働力不足に脆弱。スループットは人数に依存。

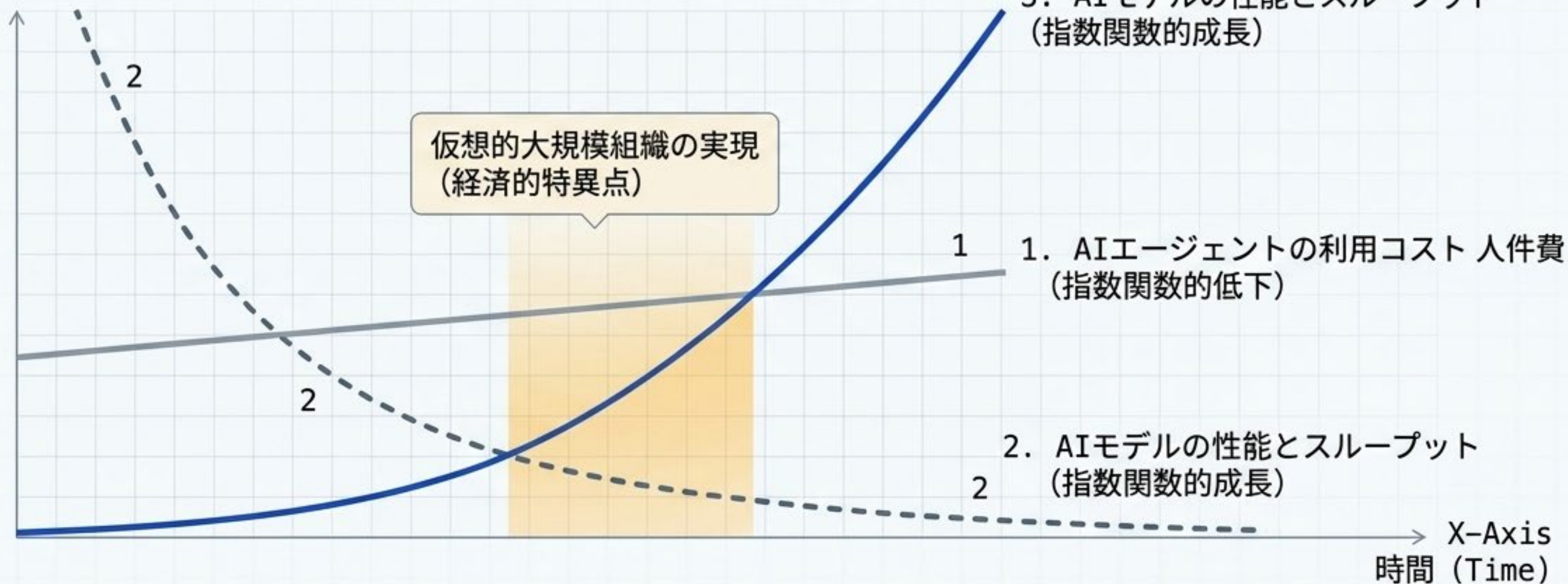
モデルB: ハイブリッド型 (Hybrid)
体制 現行人員規模の維持
AI活用 プロンプトによる定型業務の効率化
特性 迅速化はするが、人間のタスク処理速度が組織全体の上限を規定する。

MIXI知財室が到達した最適解
モデルC: 人少数+AI拡張型 (Human-Minimal + AI-Scaled)
体制 少数精鋭の戦略的人員 (5人規模)
AI活用 AIエージェントの自律実行による非線形スケール
特性 低コストで「30人分のアウトプット」を生む仮想的大規模組織を実現。

なぜ「モデルC」が必然なのか：仮想的大規模組織の誕生

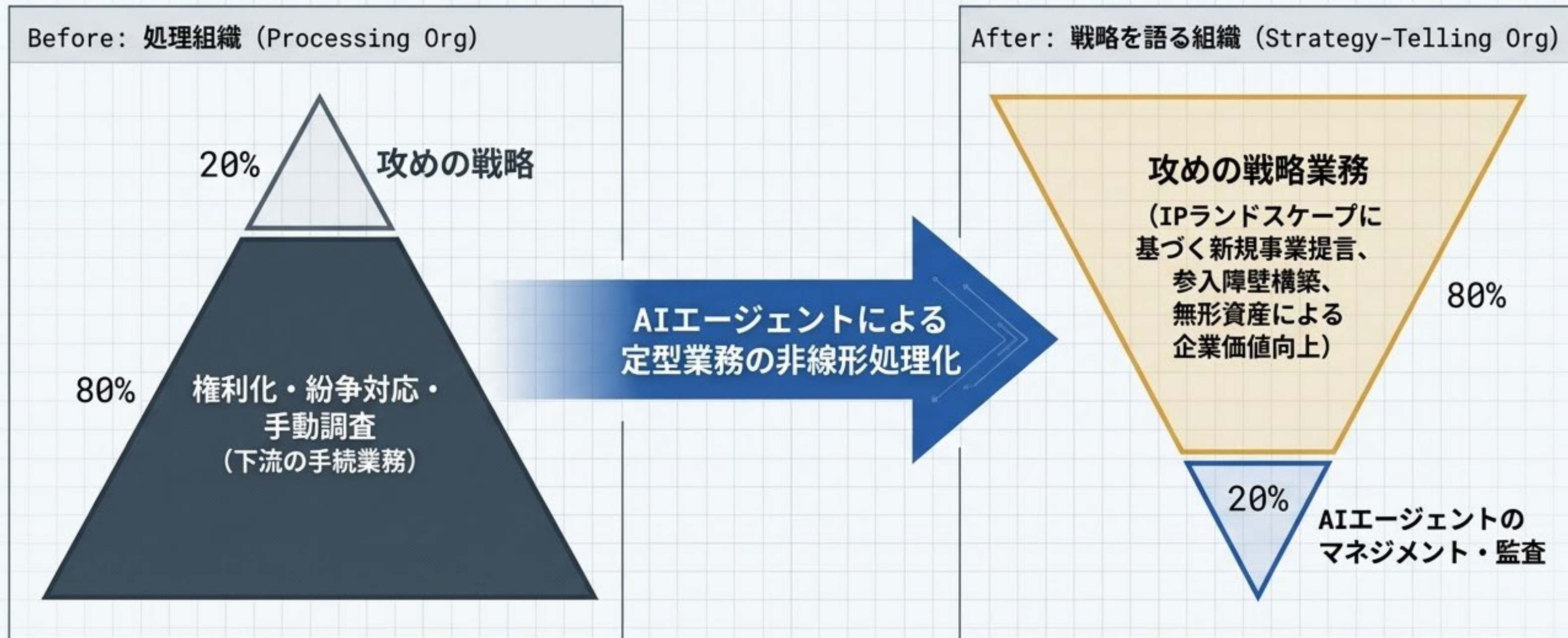
AIの性能向上とコスト低下が交差する現在、人間の増員に頼る組織構築は経済的合理性を失う。

Y-Axis: コスト / 遂行能力
(Cost & Capability)



「処理組織」から「戦略を語る組織」へのパラダイムシフト

下流の手続業務をエージェントに委譲することで創出されたリソースを、
企業価値を向上させる攻めの戦略へ全振りする。



次世代知財組織への羅針盤

知的財産部門の競争力は、人員の数ではなく、
どれだけ高度なAIエージェント群を戦略的パートナー
として組織構造内に組み込んでいるかで決まる。

01 Process

労働集約からの解放
(特許出願リードタイム最大90%削減)

02 Knowledge

laCによる組織知の定着
(GitHub上でのプロンプト・コード管理)

03 Strategy

仮想的大規模組織による企業価値の牽引
(人少数+AI拡張型の実現)